

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024. 7



令和6年7月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第7号

No.794

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二四年 七月号 (通巻七九四号)

◇今月の二十首詠……芽吹き

滝田靖子 2

■作品

〔A〕

ばばりようこ・浜谷久子他

A 林 清江他 18

B 芳賀町子他 50

C 春潮洋平他 61

A 蒲原清美他 74

■オリープ集

国原喜美子・こなかよしと他 38

◇今月の二人

植木瞭子・おおたみどり 14

私と短歌との出会い (263)

小泉澄子 17

■両角徳子歌集「街村」批評

磯田ひさ子 30

頭を上げれば空が近づく
信濃の自然、農に勤しみ、家族を愛し

藤澤元子

■〈第一歌集を読む〉 16

中島央子歌集「桃李」

34

—美しい日本語・含蓄のある言葉—

伊東ミイ子

■鑑賞・三好直太の歌 12 (つむじ曲り) 久我田鶴子 44

送風塔 藤森巳行 45

■遊覧寄港 (鶴外と家族) 森川淑子 46

■歌壇月旦 西堤啓子 47

能登半島地震

◇シルクロード・カフェ —【責任編集】 木村文字 48

■五月号作品批評 66

A……………柴田登志恵・山野幸司

光広祥子・梅本武義

B……………沖田誠子・島根美智子

C……………小野雅子

オリープ集……………近藤芳仙

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

報告・両角徳子歌集「街村」を読む会 深井喜久代 84

最近の歌誌より (編集部) 85

第32回実務委員会報告 86

クリップ…………… 88 神田通信……………表3

芽吹き

滝田 靖子

昭和三十五年生まれ。
昭和六十一年地中海入社。
新樹の金所屬。

鳴きかはしながら早暁に行く鳥よわたしは何処へ帰るのだらう

ウォーキングのつもりに家を出たはずが桜の下をうろうろしてゐる

西行のたましひが埋めてあるんだらう気が狂ひさうに今年の桜

左手に結婚指輪をしてるとふことさへもニュース大谷翔平

衝へてきた獲物を弄つてゐる鳥の艶艶と黒いその翼 不穩

「日本はここまでできてしまったのか」さうだ日本は武器を輸出する

自らの手を汚さない犯罪を企むひとりやうに日本

いつの間に厚い雲の下走つてる陽射しに浮かれてゐたはずなのに

さうやつて老後を生きていくつもりどうせと所詮を使ひこなして

捨てゼリフ吐いて終はらせし話し合ひの空疎な堂堂巡りを嗤ふ

陽だまりに冷たい足を投げ出して終日読み継ぐ『劍客商売』

封も開けぬままの白衣のためらひもなく断捨離の袋に入れる

夫も子もゐないわたしの終活は断捨離よりもあつさりしてゐる

看護師にありし日の記憶ぎつしりと詰まる身体を粗末に暮らす

真夜中のテレビドラマに涙するいつからこんなわたしになつた

おのが手に将来を壊してしまひたる青年のタトウー或いは自傷

分け入つて青い山に行く山頭火の深い孤独に慄然とする

さみどりに彩られていく里山の木木の新しい春を羨しむ

旅立ちを見守る仕事手放して里山に芽吹く命見てゐる

新しく始めるつもりのこと幾つほつたらかしのまま春が逝く

作品 A

ばばりょうこ

夢の残り火

・鹿

信心の心得の無き我なれど裡なる神に救われてはいる
もう花は咲かぬであらうと嘆きいたれどポツリと一輪おくて咲きの汝
夜半めざめ夢を反芻しておりぬまことしやかなるゆめの残り火
葉桜のもなかというを老鶯は晩生なるさえすりややに遠慮して
やみくもに逢いたくなりて途中下車この不意打ちを喜びで返して下さった
石垣の間よりタンポポ咲きいでて見てよ見て見てと秋波送りぬ
三人の姉妹もときの次女・三女・病む我のため探しあてたるクローバーの四つ葉

浜谷久子

息をする

・地

片付けたい雑多の荷物片付かぬ一つに資料積もり積もって
暮いきた人びと今は亡きあとの寂しさだけが紙を黄ばます
風便り節目の糸を結び直す過ぎる多くは胸処のままに
今年はと同窓会の五十年ぶり思い出抱える三人のきずな
出会いそして見送る人びと返せぬ恩やり過こした時ついに戻せず
永の別れ時を要して背う日ひと歳ふた歳深まる寂寥
さりげなく交わる景色に息をする新たな出会いと旧知の縁の

檜垣美保子

少年

・鼻

遠くまで飛びたくてつよき風を待つハナミズキ四枚の苞はふるえて
花の名をおしえてと言う少年が花に近づき少し小声で
植え込みの瘦せたるみどりを凌駕せり五月のカタバミカラスノエンドウ
声のなくすぎゆく鳥の白き糞袋快に降る赤き車体に
階段の曲がり角から少年は顔だけ見せてふいの「おやすみ」
朝刊のことりと落つる音のしてつづきに鴉の濁声を聞く
めざめたる午前四時半壁ぎわに牡丹の花の咲ききままれり

福田庸子

春を酔ふ

・今

植林の黒木の森に春を酔ふ幾世経たるや山桜花
住む人の消えたる映に今年また傾りをあはく山桜立つ
映深し見上ぐる傾り薄墨の山桜咲く巖かに咲く
人間の触れ得ざる場所に誇るなく咲く山桜見あきぬものよ
落葉松の実生浮き立つ尾根の道湿める落葉の足にやさしも
両側に小さき沢を落とさせて時の春の音しみゆけり
両耳に左右の沢音くらべつつ赤上沢と地蔵沢登る

藤田美智子

ペダル

・新

直径の小さき円を描きゆく幼き足の漕げるペダルは
池の天使と言はるるならば悪くなし水蚤といふわれの渾名も
自らの重さもてあましたることく紫木蓮の花びらの落つ
いかやうに人は言ふともねたまるるものはもたざり若葉きらめく
太き眉をはつかに寄せてゐる君はわれに聞こえぬ声を聞きぬむ
母の命日が早く来さうな気さへするあつといふ間に緑濃くなり
憚らずもの言ふ人とされてゐる蹴るにほどよき石見あたらす

藤森巳行

無比・無辜

・銀

人生は妻との二人三脚か息は合はぬがゴールは近づく
大勝利なんてなくてもいいんだよ地道に生きて負けない人生を
手も触れず一緒に通つた大糸線今なら笑へる君との純愛
我が妻にオール・インした人生をいまでは少し後悔してゐる
今日一日老後の時間は長いけど八十年はすこく短い
永遠に地獄の底を這ひ回れ戦争仕掛けし無比の悪人
無辜の民殺める為政者許すまじ拳握りて画面を睨む

本元由美子

夫 病みぬ

・岡

絶対に救急車など呼ばないは夫の矜持たりしにその時の来ぬ
着替へなどそそくさと詰め病院に 振り返る窓に夫の白き顔
面会のかなはぬ夫の病棟に桜吹雪の春風やさし
病人の苦痛と不安を和らげるゴッドハンドのドクターの欲し
インフォームドコンセントとかセカンドオピニオンとか難しきことなり
原因のわからぬままの退院も唯の喜びは家に帰ること
ひとまづは夫の退院に鯛一尾新鮮なるをスーパーに探す

牧 雄彦

老核

・大

ソメイヨシノはクローンがゆゑに美しくはかなしといふあはれ子は無く
学校の北隅に咲く老核が曇りの空を覆ふ今年も
校庭の桜木なべて老いにけり脂噴く太き幹はねぢれて
終業のチャイムがひびく校庭を囲みて老いたるさくら咲き満つ
放課後の中学校より響きくるトランペットの音たどどし
枇杷の枝の先に若葉が噴き出でて守るや古き葉が囲みゐる
遠雷のとよむ夕暮れ服を着る犬曳くをうながわれに会釈す

松浦禎子

聖堂

・羊

地震あれば日々つばらなり能登羽咋折口春洋の郷なりおもう
折口信夫、養子春洋の墓碑ありといまさらに恋う能登の浜辺を
病棟の近くに眺む聖堂のみどりの屋根に夕陽集まる
「北欧神話」友の訳しし現代語集わが手に乗りて瞬時ゆさぶる
あこがれの北欧の地をおもうにも衰うる老いかなしみ深く
右ひだり子に守られて退院すわたしはすでに立派な嬪
個性まさる父母を描きし也哉子さんの本も一緒に今日退院す

松永智子

足の音

・嵐

手ぎはよくととのへゆきますヘルパーさん音のなき休日ビルの
ヘルパーさんことばすくなく「かへります」夕べの食事とのへ行きませ
足の音しづかに人の帰りますはや遠くなり 目を閉ざしきく
細りゆく命の影を踏みもどる父母弟すてになき里
梨の花散りくる下のおままごと「こんにちは」「はいいらつしやい」
声にならぬことばをのこし見送られ父母の亡きふるさとを発つ

松本多摩子

新人生

・桜

インスタに孫の動画は楽しそう友のまん中花見している
 ボールペン消えないと泣く新人生そうして一つ又一つ覚ゆ
 花散らす雨となりたる入学式負けずに散らぬ花もありたり
 亡夫植えし鳴子百合咲く庭の隅三十年経ても衰えしらず
 白杖の少女に手を貸す電車内病院帰りにやさしくなれた
 園庭におとこ先生とかくれんぼ爆ぐ子供の声賑やかに
 生協ではったり出会う五年ぶり縁つなかり生きがい見えた

三浦好博

破壊される言葉

・鉦

「罪なるはガザに生まれしこと故か、苦しいよ早く殺しに来て呉れ」
 歳なればテレビを見つつ眠りある生きるゝ死ぬの間の眠り
 被災地は何も交はず義援金少しにて済ます寂しき絆
 AIがガザ攻撃に使はれて想定内とふ誤差三百人
 地球儀を回して次はどこにするひとりブーチンにやりと笑ふ

「原発は自国に向ける核兵器」樋口英明氏の言葉噛み締む
 破壊さるる言葉の数々「丁寧に、誠心誠意、全力で、真摯に」

三好聖三

こよみ

・伊

馬鈴薯に発芽の兆しおちこちに盛り上がりたる土の見えたり
 辛夷から桜へ渡す花のとき無人の駅の夜をさやげる

トラ吉が身重の彼女を連れて来る野良の仁義をなけば捨てつつ
 河原者へいたる心やこころざし密かに溜めてゆく橋懸かり
 エコールに馴染めぬ男が町を出る背に凶暴の烙印を受け
 武器を売る男のことを聞きにゆくアデンの古き理髪店まで
 なげなくツインタワーが建っている(あの日)以前の映画のなかに

御代田澄江

東御苑

・茨

コロナ経て五年振り公開の東御苑いつも新鮮三度目なれど
 森林文化協会のグリーンセミナーガイド丁寧松の廊下跡、大奥跡と
 竹林には四角い竹も生ふ握りて見る順番並びなるほど四角い
 東御苑巡る四十箇所時間余裕なし土産も買はずと娘にこぼす
 土産なしと嘆かふ吾に娘かもあれこれ贈り来東京駅地下土産
 八十八夜越え野にも山にも緑溢れ吾庭もミミザ映き垂れ白蓮木犀新緑に萌え
 知らぬ間に他国の戦に参戦し武器持ち孫子ら兵役召集の世来るや危ふし

もとむらしげと

水仙

・そ

黄の水仙生家の庭に咲きいでて臆に顔てる母のおもかけ
 雪柳こぼるる生家の庭に佇てば朽ちゆく家の歯車の音
 アマリリス大きな蕾ひらく刻待つがに黙す茎を立たせて
 ゆくりなく世を去りしかな壁掛けの母の暦を捲ることなし
 ゆえもなく悲しみは来る空の背コンビニ出でて見つけておれば
 とめどなく散る桜吹雪ゆうぐれを過ぐる車に花びらのふる
 あたかき日の続きいて今朝の寒さ裏金騒動しずまりゆきぬ

桃原佳子

報せ

・沖

緑川の土手は春なり青空に吸い込まれるか雲雀鳴きおり
 時ならぬ嵐に私事を阻まれて春の予定の狂ってしまったいぬ
 認知症すすみ施設に入りましたという報せのハガキが届く
 施設より自宅に通う時もあり家財全てを遺せるままと
 風もなく淡き日差し心地好し畑の手入れに一日を過ごす
 まだ暮れぬ空に浮かびし白き月囀へ急ぐ鳥をながむる
 西窓を開ければ泉の声聞こゆ住み処にあらん鎮守の森は

山下雅子 力

・習

養学登志子 芽

・發

年明けて早も迎うる春彼岸參れぬわれに幕前の写メールありありと紅梅はなやぐ境内に伯母と母おり昭和ただよう訣れたるTさん偲ぶコルチカム淡紫色の花みこと咲きたり雪柳垂るる庭に優雅なりしS夫人の笑顔あらわる
ほつほつと開く桜は東の間に満開となるいのちの力
近々と見下ろす花の息づかい満つる力のよるこびならむ音もなく降り出す雨のしつとりと葉桜つつみ鶯うことし

山野幸司 劇場

・沖

横田敏子

木野正登氏

・福

ミュージカル子ども歌う劇場にしまらく遊ぶはずきほぐれたりこの世からあの世導くミュージカル孤独なる娘がカナリヤ抱く友だちは良いと合唱子らの声劇場に満ち身にまとい出ず子どもらの演技に心寄する時ガザ・ウクライナこの世を忘る並びる客と向き合う若き子らますますに舞台つらぬく隨民族の衣装着ける幼な顔たからか歌う大の言葉
開演に届かず闇の席に着き広がる世界風々の声

山本 孟

春折り折り

・大

磯田ひさ子

争ひながら

・森

黄葉の散る竹林に斜陽射し倉庫の壁にしましまの影ペランダに雀数羽が日向ぼこ窓よりちらと目が合へば逃ぐ歯科医院待合かざる盆栽の藤の花房伸びそろひけり
足に効くサプリメントの広告をしぼし目にして折り畳み捨つ同期生生き残る人逝きし人 湯船につかり目を閉ちて想ふ
今生きて過ぎ来し方を踏る廻桜満つ日に笑ひ盈ちたり
哲久さん海底隆起の大地震「冬滝」を詠む海岸は消ゆ

小鳥には木の芽のしづく旨からむ羽ひとつ振りも一度ふふむもういいよねこまで生きれば医師は言う望みも悔いもあらずとわれは治るといふものではないが暫くはおさえるという新葉ありしと高額にて治らず尚も副作用苦しむこの身見せたくもなき
頭髮の抜け出す前に美容院 うまそうな寿司 朝までテレビ
検査検査折れ線グラフ下向なし医師は笑みつつこれブレイキだよ
菖蒲の芽白き名札のそらい立つ読みゆく程に夢のかけはし
木野正登氏 経済産業省の職員にて十三年前から福島に住む
「住んでみないで何が分かるか」と言われたる原発処理の担当者なり
「原発事故の処理は未だに途中にてわれの仕事はこの先も続く」と
今の世にこのような人がおられたか 驚き、感激、胸熱くなる
福島を終の住み処と穏やかに話す木野氏をテレビにて知りぬ
遠き日に夫と求めしほうたんの花ひらきたり 明日は命日
有る無しの風にほうたんたゆたえはわれもまどろむ夢見「ここに
連れ合ひがめての語や老いたれば呆けたもん勝ちと笑つていふは
さびしさは内へ内へと積もりゆき想定外のわれにとまどふ
日ぐすりはいつしか効いて来るといふ人の言葉に支へられをり
だしぬけにふぶく桜を仰ぎたり夫亡きのちのひととせ過ぎぬ
流水のぶつかり合ひて離れゆく風速湖ひろく青くなりたり
雪うすくなりたる岸辺に水鳥らいづくともなく湧きて賑はふ
砂浜に打ち寄せらるる小魚を争ひながら浜鴨漁る

市原やよひ

花桃

・萬

奥田陽子

雪あかり

・羊

花桃の蕾に雫光りいる目に見えぬ雨降っているらし
閉校が三百ありと伝えいる令和六年三月のこと
二部授業ありし彼の日はまほろしか切なく聞けり閉校ニユース
さくら咲く児童公園幼らの声の弾けて春は来にけり
ぬめぬめと生れしばかりのかなへびか鎌の先をするりと逃げる
たんぼぼと童かたばみ残し置き庭の草取り終了とする
雑草の中に花花咲き満ちる広き庭持つ人住まぬ家

梅本武義

体験

・羊

小野雅子

五月

・羊

膀胱にカメラの入る体験に腫瘍があるの医師の声聞く
手術での最悪事態に署名する妻子は楽観吾のみ不安
付き添いの妻より吾が健康に見えて居るらし待合室に
診察を待つのは長く一日の過ぎるは早し東の間の八十路
手術日の近付くにつれ心急くなさねばならぬを次々気づき
花が散る平均寿命にようやくと思う日級友の計報の届く
生れ育ち終の住処か夕光に白くふんわり李咲く里

大浪美雪

こみち

・森

神田鈴子

春

・大

お花見に最高と聞き訪ねたる「春のこみち」はニュータウンの中
くの字形の「春のこみち」は一里弱さくら大樹の天蓋つづく
楕圓より半世紀経るニュータウン並木のさくら大木となる
録り日のさくら並木は白白し根元の連翹黄の色強し
貝塚や古墳を真中に整備さるニュータウンとは色のない街
瓦葺の家見えずして外壁の明るき家並ニュータウン若し
横町にあるはずの店蕎麦屋などみなビルの中歩く人見ず

カーテンの向うより来る雪あかり暫しを立ちて降る雪をみる
早春の雪はしずかに舞いおりてなごりの冬の思い告げける
雪の上に残す足あと早朝を出でゆく人らうしろ背を見せ
冷えしるき水流しおり窓外は雪の積もれるしずかなる界
むっくりと土もちあげる球根の秘めたる力ひかりの中に
誰か見る小さきすみれ群れ咲きてそのみ草の刈られていたる
遠きよりきらめきやまぬ白蓮のあくがれのごと掲げる蕾

桜のはな咲き静まりて散りもせず街灯の灯に白々とゐる
過ぎし日の桜の姿おもはるる勢ひありて美しかりき
制服の少女らのゆく上に咲く今より色濃く咲きぬしさくら
さまよひはせずまっすぐに昇りゆく一人のひとに抱ける想ひ
名を聞いたことある人の計報載る百歳ちかし時のかなしさ
高齢者割引の日の男客 買物かこにカップ麺おほし
見事なる毎におもふ小さくてすっぱい昔の五月の苺

またの逢ひあれと願ひて雛納む生くる力を折る夜の更け
さくら咲く弁財天へ子らと行く花見叶ひし心うららに
花満つる桜並木をめぐる朝背にあたたかき光受けつつ
高校生となりたる孫の入学式生きてこの日の晴れ姿見る
新しき制服まとひ澄ましめる孫に明るき道の開けよ
子と二人京セラドームのネット裏にトラの咆哮ひびくを樂しむ
近々と選手の表情見ゆる席阪神ファンの熱気満ち満ち

上林節江 優しき時間

・湾

水芭蕉の花さく声の呼ぶようで栗駒山のしきりに恋し
 かんかんと炭火は熾りまだ小さきイワナが売らる山荘の春
 ふたたびの訪れあろうか叔母かこむ彼岸まじりの優しき時間
 明日の日を待てざるごとく声を張り九十二歳の叔母の饒舌
 冬山が春山となるしるしとも虹大大といただきに立つ
 きよらかに雪消の音の山に満ち命くまなく新しきかな
 いくたびも振り返り見るふるさとの山の視線がせなを追いきて

菊地栄子

枇杷の花

・海

指先に甥の頭を掻きやりぬ教師に疎まれしそのちぢれ髪
 一番星だけ輝いている夕まぐれ五年日記帳抱えて重し
 前方より飛び来る多し綿虫のほの背き色寒さ震わす
 千切りの大根の皮塩昆布唐辛子添えてわれの浅漬け
 急須いや土瓶がうれし寒き日は一杯ならずお代りをして
 はかなきは落し物のようにならずくまりやがてカサコソ音立てて消ゆ
 暮れ果てて甕たりたり小さな枇杷の花咲くいつもの道が

草刈十郎

春一番

・世

草の絮風に命をあづけては未知の世界へ旅立てるなり
 生みたての卵の温み手のひらに伝ふるほどの春となりたり
 平和ボケのままで逝きたきそんな世が続きゆくことひたに願ひて
 宝船こぐが如きの五人衆裏金のこと如何に答ふか
 もうそろそろ出番ですよと田の神を揺り起こさむと吹く春一番
 われ昭和一桁生まれ風光る九十九年の春迎ふなり
 卒寿過ぎ卒寿の未来への一歩さあ踏み出さう草萌ゆる野へ

河野繁子

魂のどこか

・雁

われの名を忘れておりしに魂のどこかに我を住まわせるひと
 激痛に声あく我の面会に黙ってほろほろ泣いているひと
 痛み止めきき来て常にそく戻り思わず笑顔で手をのべ握手
 桜咲き散りても土を踏むはなく曾孫誕生スマホに見ゆる
 九十一歳の誕生日まだベッドの上で迎えし四月
 興味なき娘に野草の水やりを頼みておれど岩煙草如何に
 胃の手術三分の二は切り取られ食べる恐怖と戦いながら

小林能子

五月の風

・羊

ほの暗き八重桜散り黄緑のイチヨウ五月の風に眩しき
 日本觀光ブームをかはし里帰り菊の九月にとパンコックより
 平和部隊に入りたる友はインドより極東特派員うちつれて来ぬ
 イランへと嫁ぎし人を香港で見かけし噂たしかめ難く
 帰国延期のメール短くドイツより不安滲みて暮れてゆく春
 隣家より賜りし一茎はなやかにジャーマンアイリス「白の上の白」
 吹きわたる風に泳げる鯉のほり地球家族の無事を祈りぬ

近藤栄昭

バラサイト

・虹

巻き寿司のデンプの桃色春祭り酔の匂いくる声はなやいで
 「兄さキス」危ない兄に近寄るな胃に食い込めば開腹ありと
 「閃くドア」クドアは平目の寄生虫バターで焼いて旨いムニエル
 生き物の中に生き物バラサイトうごめいているまな板の上
 おおむねは調理師さんに頼りいる包丁でよけバラサイトフリー
 冷凍で寄生虫を凍らせる凍死させればルイベ一品
 ゴリゴリと奥歯で潰せ寄生虫教授の講義寄生虫学

近藤芳仙

富岡製糸場

・信

「かかあ殿下」ふとも浮かびて身巡りの女ながめたり製糸の里に
 三山の妙義・榛名に赤城山個個にそびえて空を切りをり
 コンニャクの直売所など見過ごせぬ目に新しき群馬の香り
 製糸工場見て回りたり広広と機械のならび女工らの頸つ
 太りゆく白き蚕と繭の玉身に沁みて我が育ちたる家
 信州の農家はみんな飼つてゐた蚕のかせく現金を目当てに
 家中が蚕の住み家その間にあそび育ちし春夏の記憶

坂上直美

春日夢想

・天

山の色今日くきやかに見えにけり四月の空の暗れ渡りいて
 春なれば山辺川辺に行くべきを家に籠もりぬ何かもの憂く
 今さらに哀しきことはなけれども春の愁いの身をめぐりつつ
 わが人の去にし翌春桜花咲き満つなかにひとり佇ちにき
 雲雀鳴かずまして千鳥も鳴かざれと聞けゆく春に君を想いつ
 目借り時何匹の蛙われの目を借りいるならん眠し眠たし
 春の風そよと吹くゆえ歌一つつかまんとする空に手伸ばし

坂出裕子

さくら

・洛

川べりのベンチにひとり座しをりて花を眺むるしづかなる刻
 神さまの賜へる刻か風もなく花びらの散る岸にをりつつ
 ありとしもなき風に乗る花びらは土に散りゆく競ふがごとく
 花びらは草生に散りて安らげく己を得たるさまに静けし
 花びらは花びらゆゑに木の元の草生にありていのちかがやく
 絶え間なく花びらの舞ふ木の元に座しつつ永遠の刻の過ぎゆく
 あまりにも愛しきがゆゑに拾ひたくなれど拾はず帰る花びら

佐藤道子

老い

・甲

ゆきずりの人の給へる蠟梅の朝の静寂にしるく匂へる
 一日一日何事もなく過ごすこと仕事となりぬ九十五歳
 お元気ですねと声かけられる朝の道綱渡りなる一日一日を
 心不全月に一度のクリニック超高齢者と言はれてしまふ
 タンポポが野菜の様に葉をふやし高々と伸び綿毛を散らす
 三月のタンポポ余りに大きくて見とれてさ庭はタンポポ林
 時計草朝の光に照り映えてあまた咲きをり四月の半ば

篠原まり子

テレビ

・天

ガザの児の細き細き四肢写るとき飢餓極限に哀しみ深く
 国際の映画祭にて輝けばトイレ・ツアーが催される国
 らんまんの花の賑わい速くしてテレビに向かい「哦・メリ」を観る
 熱湯に冷凍しじみは一瞬の目覚めを見せて沈む静けさ
 拉致の子を返せと願う母の顔北朝鮮のこうまん顔
 折おりのドクターヘリの騒音にことなきを願う病い持つ身は
 いつの日か生まれ変われば何になる小鳥と暮らす私になる

柴田登志恵

湖

・天

観音に護らるる里の花けむり自治集落の古文書見にゆく
 はなだいろたたへる湖の水深く小さき舟に小さき魚とる
 児ら泳ぎヨット浮かぶる湖水を飲む淀川水系うからはらから
 夕ちかく赤金にそむ比良の山むかうの都も燃えてゐるのか
 湖に入る川の面のうすべには深き底ひのむくろに降りつむ
 帰り来ぬ湖底のむくる思ひつつ一日を過ごす里の観音
 まどかなる湾を縁取るうすべにの対岸にありし御宿湖里庵

須川千恵香

自然と私

・眉

卒寿齡稀に芽吹きし学環まがたまは葉群れ茂れど花に至らず
来る春はきつと咲くとこの予感ありその感動を待ちあふる心
古き鉢早くも学環咲きをりて入退院の裡なる目覚め
掃宅どき冬枯れ紅葉芽吹きもて徐徐に広ぐる至福の出合ひ
朝日さし繡こは熟れ実を掲げをり小鳥の声に久々に癒やされ
鳥の声去りて翌日繡の木は熟れ実除かれかるやかに立つ
奄美島シイノトモシビタケ列なして夜のみ光る賜物ならむ

鈴木結志

孟母断機の戒

・福

「孟母断機の戒」尊びておのれを正しみじかうた詠む
ふでとりて書かの技を練る生きすがた一人よがりの健康維持なり
明治開拓の記念樹さくらにこぶ立ちていちりんの花塚として咲く
花万朵地上にうつり芝さくらホルモン薬効を生むほどに映ゆ
み仏に感謝をささぐ一助ともさくらの花の香りみなぎる
一言二句耳澄まし聴きねんごろに時を重ねて詩情に結ぶ
ひとときの論もおろそかならずしておのがうたへのすこやかを得る

関根榮子

消長

・埼

数えねど五十株ほど咲きしエビネラン一株植えしは三十年前か
蜜袋の勢い激しくこの春はミヤマオダマキいまだ芽吹かず
ムラサキもイカリ草もなしいつの間に小さき庭の消長多し
カタクリの群落見つけて声上げし友のいくたりいまはもう亡く
山歩き楽しみし春も遠くして庭に残りいる山草を探す
若きらのTシャツ白し冬服で急に夏日の街行くわれは
流星群の深夜あるとう宇宙よりあまたこぼるる光を見るべく

関根和美

予見

・埼

問いたきを秘めもつ朝あしたしらすさきの一羽ゆっくりわが視野に入る
母さんと呼んでもいいかわが声に逃げずたたずむ白さき一羽
鳥をみる陶磁器をみるまなざしのふかくやさしき母にありしよ
時ならぬ寒さも明ければ真夏日と定まらざるに心身乱る
摘みのこすあの面この面の地の上に露となり伸ぶすくすくと伸ぶ
画面には野生の馬の群れ遊ぶ夕陽の丘よなせなみだ湧く
予見とも思えるわれの歌一首四十年経ておどろき見入る

高尾恭子

舟唄

・大

またしてもSDGsか正論に足のシモヤケむすむす痒い
マルハラにカスハラバワハラはらはらと柔らかすぎる言葉をかす
捨て方のわからぬ電池をためこんで何処で生きてもひとりはひとり
解説のスマホ練りつつ光悦の書に踏みいればコートが重い
さび色に染まる夕暮れビル風に首をすくめてひゆるる「舟唄」
涙声ほろほろ沁みる舟唄のサビにワンカップ大関ゆらす
FMの流れるままに星のない夜が昨日を美しく消す

高津砂千子

瞑想

・風

大き揺れ二回ほどある夜の更けこは病院焦らずとも良し
昼寝して夕方眠り肝腎の夜を眠れずもてあましおり
三ヶ月毎に病院交わるとう一人暮らしで歩けぬひとは
余生をば大地を踏めぬ生活とはいかにさびしきものであらんか
刑務所にて角川春樹は瞑想をせしという声よみがえりくる
瞑想をせんと呼吸を整えしがあの人この人あらわれてくる
本が好き活字に没る界にいてまた読み返したい「最後の春樹」

滝田 靖子 里山 ・新

なにゆゑに売れ残りしかかくばかり甘き匂ひの真赤な莓
 セロハンを外せば閉ぢ込められてゐた完熟莓の甘き香ふはり
 この春の命のかぎり枝えだの先の先まで満ち満ちて桜
 散り敷きて雨に打たれる花びらの濡れてなほ美し桜といふは
 ふかふかと落ち葉積もりし里山に屈んで重の違ひ聞いてゐる
 片栗の咲きさかる里山の川に洗濯しよう命つてやつ
 里山の落ち葉ふかふか踏み行きてわたしの新しい春が始まる

田土 成彦 信号 ・宙

清貧とか着た切り雀などといふ言葉肯ふ良寛ならねど
 二十年前も着てゐたブレーカー今年も出して花冷えに着る
 このシャツの十年ばかり着続けてくたびれた綿の肌触り良し
 パンツとはスボンのこととユニクロのチラシ眺めてこの頃に知る
 カタカナの衣料のチラシを眺めをりカットソーとは武器にはあらず
 凶の籤引きし思ひに今日三度渡る直前に替はる信号
 行きはバス帰りは徒歩のスーパーに菓子パン三つほどを選びぬ

田土 才恵 西田さん ・宙

フアックスに來し歌を読む愉しみの露と消えたる春浅き日に
 もう一度話してみたしと思う日の遠ざかりゆき春愁深し
 一人居ににじみくるもの寂しさはわが身のうちに溢れんとして
 手作りのブックカバーの布の色人柄みえて今も偲びいる
 庭に生る小袖の話愉しげに語りたまひしは去年の晩秋
 清らかな花を湛えて囲まれるデスマスク最後の記憶にとどむ
 温かき家族の笑みに囲まれて棺の蓋は静かに閉ざさる

玉井 綾子 オルゴール ・羊

気が向いた時手にしてた携帯を朝ごとに見る部下持ちてより
 フォーク型の並びのようにひらがなが振り分けられるフリック入力
 平日のイベント検索、パチンコとハローワークが手掌に並ぶ
 右肩に通勤バッグの食い込みぬ何が重いと言うわけでなく
 買う物はなくとも仕事後スーパーに立ち寄り見切り品棚を見る
 残業後遅く帰りに豚汁と煮物を作る手のみ動かし
 テンポだけ遅くなりゆくオルゴール最後の一音のように寝落ちす

中島 央子 花冷え ・森

何ごとの無き一日にスパイスを振れるごとくに雨降りはじめ
 雨の音を池は吸ひとり懸命に咲かむとしてゐる桜映して
 日没が日毎に延びてやり残したことがかり思ひ出させる
 「あれ」「それ」と指示代名詞をまき散らす鈍きあたまをさんぶり洗ふ
 花冷えの夜はむすめと差し向かひ熱燗一献小犬も待る
 年毎のわが検診表に「歳相応」と医師は宜ふ肩・腰痛むに
 寒暖の段差あまりに大きすぎ聴くともなく聞くラジオ深夜便

永田 進一 花 ・山

愁ひつつ歩めば櫻花かけに誰が面影の頭ちて招かむ
 藤棚の下に佇む駒鳥のビョンビョンと跳ぶ池のほとりを
 乱れ舞う小さき蝶は草の上白蝶二頭黄蝶は一頭
 花桃は枝を抜けて咲き盛るキクモモと名付く豪華な装い
 キンボウゲうまのあしがた花卉を開きて虫を招き取るなり
 夕光の移ろいのなか咲き盛る花の命の今盛りなり
 冥界へ移りし人の数多いて櫻花散り敷く野辺とはなりぬ

永塚節子 好日 銀

生れし日をとにもかくにも迎えしこと両の手合わせ報告なせり
生れし日にエンディングノート書き記す思いつくまま気の向くままに
緊急の連絡先と友に見す微笑みつつも否とは言わず
枝を切られオブジェと化したる一本の赤き新芽は生きている証し
桜散る小学校の校庭に人待ち顔に並ぶブランコ
出動の褒美のひとつ給身に朝風受けつつ海へ向く道
新種という緑のベチュニアプランターに並を好まぬ性を映せり

仲西正子 命 沖

初咲きの仙人掌あいらし綿姫ふれたるのちの痛み鋭し
仙人掌に産毛のごとき棘あるに花めざしゆくでむしの舌
まだ小さきでむし天晴れ仙人掌の棘くぐりきて花喰みており
若葉する枝の先にも花持たせ九年母の木は張りて喜ぶ
恋みれん滑かにうたう歌姫の遺されし声「もう一度会いたい」
空爆死の母より命の生れたるとラファよりのニュースああ肝苦りさ
孤児として生まれたる児の産声は悲痛な叫びラファの空爆

中村博子 北山別院 漣

菜種梅雨の合間のひと日啓子さんに晴れ女と言われつつ北山別院
杖を突く友の歩調に合わせつつ修学院駅からゆるゆるの連る
別院の大屋根瓦にあらねどもシルバー色に比叡もひかる
本堂へ上がる気力の失せし二人賽銭箱の前に合掌す
石道を下れば近くにバス通り手近な「なか卯」に入りて座りぬ
画面見て食券求めん初体験他人に尋ねて親子并二つ
楽しくも疲れ果てたるうつつし身の老いしを知りて炬燵へ雪崩る

西堤啓子 藤井八冠 天

迷いを脱ぎ捨てひとり山を行く林檎ジュースは冷たく甘く
空を行くノスリの目にはあきらけいし地を這い生きるものたちの影
その昔祖父はタヌキを食すとう藤井八冠に似たる青年
ツタカズラ絡みほどけぬ網となる少しずつ少しずつ切つて青空
雪残る北信五岳ま青なる空に喫水線ひき出航す
病が連れてよこした易度・作話 誰も悪くはない春です
あつてはならぬ濁流地を覆う シャボン玉 猫 ピアノの調べ

久我田鶴子 24/93 羊

二十四の母のからだを脱いでてこの世に息を吐きしか五月
二十四の母のからだを吸ひながらこの世に馴染みゆる日々あり
二十四の母に抱かるる赤ん坊われの見えてあしこの世のひかり
二十四の母のまる顔やはらかな表情のなかに笑みをたたへて
ここにいま九十三の母がゐてくしやくしやの笑顔みせてもくるる
母はいま九十三のおばあさん遠い記憶のなかをただよふ
指差してわたしと赤ちやんと母の言ふ古い写真に赤ちやんのわれ



今月の二人

思い出

植木 瞭子

セピア色のアルバムめくるかのごとく遠い思い出三十一文字に
父母が毛を刈り取りし羊たち「山羊になった」と幼き吾は
人形の服を作りし幼き日ほめられ今に続く手仕事

緑川へ水泳学習皆で行く清き流れは心も育む

川原にて穂が出る前に摘むツバナ甘き花穂を食みし思い出
「あっあ」と夜空指さし驚く吾子澄んだ瞳に光る満月
ゆっくりと初めて立った吾子一歳満面の笑み広げる両手

「もしもし」と大きなおなかに耳をあて返事待ってる二歳の吾子は
夢で見た戦隊ものを吾子しゃべる片言故に身振り大きく

スキップで春を探しに吾子と行く土筆によもぎ笑顔も摘みぬ
吾子と作るよもぎ餅には野の香り「おいしいねえ」と春をほおぼる
春休み里に帰ればうぐいすが声響かせて母子迎える

孫からのお祝いライン届いた日もう古希なのかあじさい咲く日

出会い

子供の頃から国語は苦手でどちらかと言えば算数の方が好きでした。そんな私が今短歌を詠んでいる事に私自身が一番驚いています。

結婚して大阪に住み、その後奈良県生駒市に転居したことが転機となりました。それは、そこで出会ったママ友に「万葉集ゆかりの地をハイキングする会」に誘われ参加したことでした。そして犬養孝先生の講義も一緒に受講し、万葉集に惹かれると同時に、文芸や歴史にも少しずつ興味を持つようになりました。

七十歳になった頃、朝ドラ「舞い上がり」でイケメンの赤楚君が詠む短歌に魅せられ、自分でも詠んでみたいしました。そんな時、以前太極拳サークルで一緒にした田中昌子さんに短歌の会（永田進一先生主宰の「山桜の会」）に誘って頂きました。永田先生のご指導と会の皆様から刺激を頂きながら楽しんで頑張っています。

全くの初心者ではありますが、機会を頂きましたので「思い出」と題して私の幼い頃や子育てでの印象深かったことを詠んでみました。短歌との出会いが日常を豊かにしてくれているように感じています。

今日の二人

父の横顔くアルバムを開いて おおたみどり

ネクタイに背広姿で端に立ち遠慮している十八の父
 雪の日に友とはしゃいだ父が居るアルバム開くやさしい時間
 トラックの前に立つ父凜々しかり「伊勢湾台風の後」とあり
 記念日を誕生日にと合わせてる「ろまんていすと」な父をみつける
 本屋にて父が選んだ「びりっかすの子猫」似てたのかなあ私に
 木箱よりこぼれ落ちたるトルストイ父も読みしか意外な一面
 砂浜を駆ける姉弟の写真にもファインダー覗くやさしい視線
 子供らと共に始めた剣道いつしか父は指導者の顔
 妹と父は腕組み笑いおりこれができない長子の私
 一人旅写真はすべて景色のみ父が話すと広がる世界
 早朝の散歩、体操、読書またプールと続く父のルーティン
 「咲いてるよアケビの花が」うなずいた父の視線はこの先の秋
 柔軟に八十八年生きてきた父の横顔これからさきも

言の葉をパズルのように

小学生のころ、祖父が、俳句を短冊に書いて私にと持ってきてくれることがありました。その頃の私にはちよつとむつかしい俳句でしたが、そんなことも影響しているのかもです。日々の移ろいを言の葉を組み合わせながらひとつの響きの歌にしていくことに興味があり、それでも日々の合間に作るくらいで、読み解くまでがなかなかでした。

心がふさいでいた時に、ふと届いた「地中海」を開いて、読むうちに同じような環境の中にも人それぞれの視点があるのだという発見や、そのひとつひとつのお歌に励まされたりでした。

ばばりょうこ先生にお誘いいただいてからの今日、ようやくと、近頃、勉強会に足を運んでいます。本村誠人先生、それいゆのメンバーの方にもいろいろと教わりながらの日々です。

今回のお話（課題？）をいただいて、父の八十八歳のお祝いにと昔のアルバムを開いておりましたら、またその時と違った視線に出会い、まだまだなのですが、いろいろと綴ってみました。

◆今月の二人・植木瞭子作品評◆
もう古稀なのかあじさい咲く

植木さんは、生駒市在住。短歌を始めたばかり。この機会にアルバムをめくるように思い出を歌にしたと言う。

・父母が毛を刈り取りし羊たち「山羊になったノ」と幼き吾は自身が幼かった日の思い出である。父母が毛を刈り取った羊の姿を見ての驚きの声。発した言葉とともに、幼い日の出来事が鮮やかに甦る。

・「あっあっ」と夜空指さし驚く吾子澄んだ瞳に光る満月

こちらは、わが子の幼い日。初めて「月」というものを認識した日なのかもしれない。ここでも、言葉にならない驚きの声が生き生きと記憶されているようだ。

・ゆっくりと初めて立った吾子一歳満面の笑み広げる両手

前の歌と同じわが子か。初めて自分の足で立った一歳の姿が、誇らしげな笑顔と歩み出す前の両手を広げたかたちとして、今なお鮮やかに刻まれている。

・スキップで春を探しに吾子と行く土筆にもよぎ笑顔も摘みぬ

春を探しにと子とともに出かけ、一緒に摘んだ土筆や蓬。幼かった子と過ごした時間がいかに幸せであったか。「スキップ」や「笑顔も摘みぬ」にも、心の弾みを感じられる。

・孫からのお祝いライン届いた日もう古稀なのかあじさい咲く

日

一連十三首の最後は、七十歳のお祝いメッセージが孫からラインで届いた日のこと。実に、またたく間のような七十年。

「孫からのお祝いライン」に喜びながら、そこに驚くような時の流れ、時代の変化も感じとっている。

◆今月の二人・おおたみどり作品評◆
父の視線はこの先の秋

評者・久我田鶴子

おおたさんは、鹿児島市在住。アルバムを開いて写真を見ながら、父の横顔を確かめたようだ。

・ネクタイに背広姿で端に立ち遠慮している十八の父

十八歳の若き日の姿。入学か、就職の際の集合写真だろうか。初々しい服装で、端に立っている。それを見て、「遠慮している」と感じた作者。新鮮な父との出会いだっただのかもしれない。

・木箱よりこぼれ落ちたるトルストイ父も読みしか意外な一面

写真には、「木箱よりこぼれ落ちたるトルストイ」。父の読書歴の一端がそこから伝わってくる。それは、作者の知らなかった父の一面を見せてくれたようだ。

・砂浜を駆ける姉弟の写真にもファインダー覗くやさしい視線

この写真に写っているのは、「砂浜を駆ける姉弟」。写したのは、父らしい。写真が伝える、写した人の視線のやさしさ。

・妹と父は腕組み笑いおりこれができない長子の私

腕を組んで笑っている妹と父の写真。それを見て、長子の私にはこれができないと言う。長子であるゆえに、父に素直に甘えることをセーブしてきたのだろう。と、ここで前歌の「姉弟」の「姉」とは、どうやら作者のことらしいと気づいた。

・「咲いてるよアケビの花が」うなずいた父の視線はこの先の

秋

アケビの花が咲いてると言うのに、うなずいた父の視線は秋に向けられているという。どうやらアケビの実が熟す日を早くも期待しているらしい。その父の気持ちを娘は受け止める。

現在八十八歳の父。父の横顔はこれから先も、と。

何の前触れもなく「私と短歌との出会い」を書けとのお手紙を頂きました。考えても特別な事は何も思い浮かばず戸惑うばかりで二、三日が過ぎました。

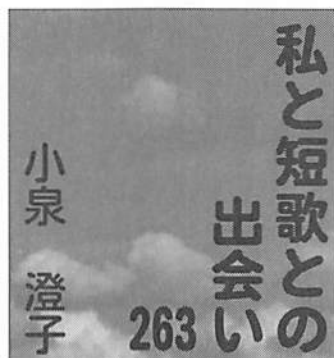
つらつら考えるに、近くの公民館で行われている短歌会の会員募集があることを偶然知ったのが始まりだったと思います。

五十歳を目前にして、再就職の職場にも慣れて来、子供達にも手がかからなくなってきた。そろそろ自分の呆け防止に何かしなければと考えていた矢先でした。早速短歌はいいかもと、とても不純な考えから申し込みました。短歌は中学校・高校の授業で触れたぐらいでしたので五七五七七以外の事は何も解らないまま申し込んだのですが快く受け入れて下さいました。

嫁入り前に買った百人一首の解説本が何回かの引越しにも捨てられずに未だ本棚にあるという事は（百人一首のカルタ取りをした事もなく育ちました）歌を覚えたいだけなく短歌に触れていたいという気持があったからだろうと思います。

自分が歌を作るとは考えもせずに皆さんの歌を読ませていただくだけでよいと思

いで入った短歌会でした。が、次回来る時は自作の歌を持って来るようにと言われました。思いの外の手でしたので四苦八苦して何とか歌にして提出したと思います。不安だらけの拙い歌だったと思います（今は何も残っていません）が、先生（当時は内田多賀生先生でした）はよくよく褒めて下



さいました。うれしくて帰り道はほんわりと楽しい気分だったことを覚えています。

その会が地中海茨城支社の短歌会でした。会場を水戸と日立で交互に開いていたと思います。内田先生を中心に七、八人の方々（多少出入りはありました）の同じ顔ぶれで続く和やかな会でした。

あれから三十五年程、自分でも驚く程長い間歌作りをして来ましたが、歌心のない私には悪戦苦闘の連続でした。未だに納得出来る歌はありません。毎月の七首をまとめるのは大変な苦勞で、心ならずも欠詠した事も何度かありました。いつも両肩に仲々終らない夏休みの宿題を背負ったような重苦しい気分です。苦しくて何度止めると口にしたか知れません。その都度、会の皆さんに励まされ、気をとり直して頑張ってきたりました。

短歌は奥が深くてむずかしい。でも、楽しい。短歌は書きとめることによって自分の考えを改めて見つめ直すことが出来ます。物事を深く見ようとしている自分に気付くことがあります。ただ心残りは、若かった頃に熱烈な恋の歌を現在形で詠んでみたかったということでした。

うまく出来ませんが一首まとまった時の満足感はうれしく、これからも続けていこうと思います。

